

地域の魅力を高める歴史的資産の使い方を創造する

38 実在建物の活用計画を考え、暮らしをイメージする

横山郷土館は優れた文化財として良好な状態で保存されている。そこで、それを利用しながら良好な状態で後世に残していける活用方法を検討した。外国人観光客の増加など日本の伝統文化に触れながら宿泊できる施設のニーズが高まっていることを受けて、宿泊し、観光客やまちの人々も集まれる憩いの場に改修提案する。二つの石蔵はレストランと銭湯に改修する。蔵に挟まれた空間はかつての銀行の風情を残した休憩所として、手前の道、巴波川に開く。奥の和室はそのまます泊室として、横山郷土館の伝統的な雰囲気味わいながら、ゆったりとした時間を過ごすことができる場所にする。改修は耐震安全性を高めながら最小限にとどめた。



写真1 改修提案模型写真



写真2 横山郷土館外観と内観

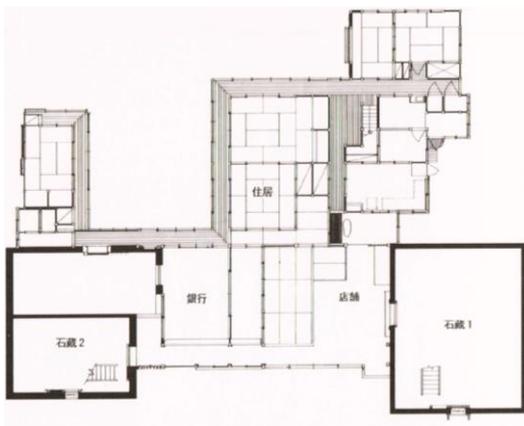


図1 改修前の平面図・立面図

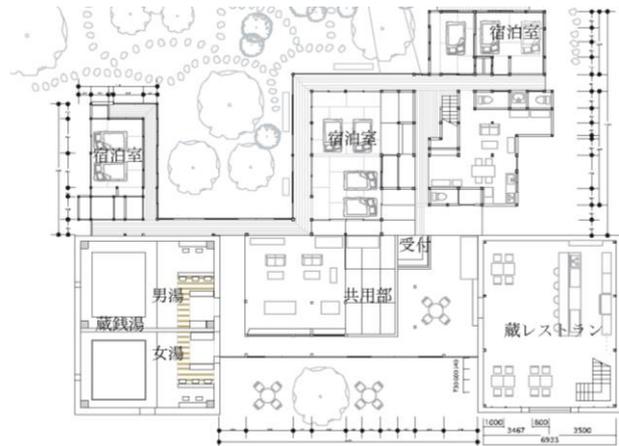
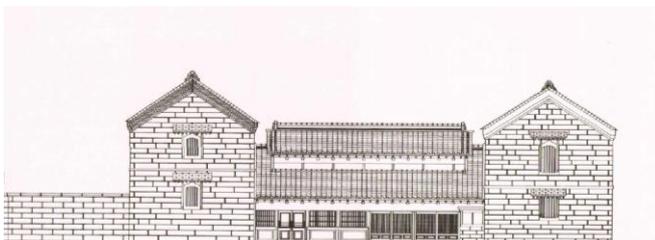


図2 改修後の平面図・立面図



■蔵レストラン



写真3 蔵レストラン内部模型写真

木造2階建ての石蔵の一部2階床を撤去することで大きな空間を確保し、石組みの雰囲気、巴波川の風景を感じるレストランに改修する。大きな梁は残したまま一部吹き抜けにし、前の通り、巴波川に向けて開口をあける。開口は40 cm角のRCで開口部を補強し、屋根は木造で支える。内部からは石蔵の雰囲気を感じながら、巴波川沿いの風景を感じることができる。通り側からは大きな梁が見え、レストランの賑わいが通りからも見ることができる。

■蔵銭湯

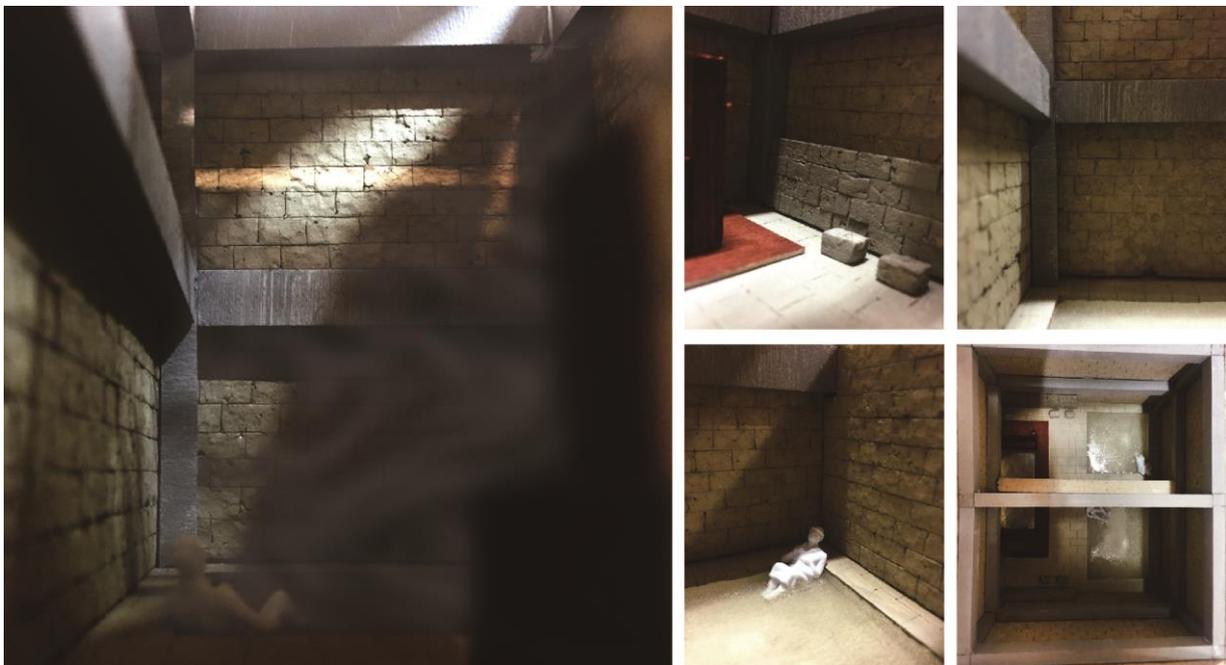


写真4 蔵銭湯内部模型写真

石蔵を石組みの雰囲気を感じる石蔵銭湯に改修する。屋根と外壁はRCのラーメン構造で支え、蔵上部にある既存のレンガ造の部分を取り除いて木造で補強し、銭湯の換気用の開口部とする。屋根と石蔵の間から差し込んだ光は石組みを柔らかく浮かび上がらせて落ち着いた雰囲気となるだろう。スチール材で石組みを補強する。

栃木町地区では、古くから短冊状の細長い区画割が特徴となっているが、現在は空き地が目立っている。そこで、指定文化財の見世蔵と隣接する空き地の活用計画を提案した。この提案では、見世蔵や新たに修景によって建築する建物をシェアオフィスなどで活用することにより、若者でも栃木の町並みを職場としやすい環境を整え、所有者の独居高齢者用の居宅を敷地内に別に用意することにより、新しく入ってきた若者と昔からのコミュニティが繋ぐ仕掛けをつくっている。細長い区画を活用するために、新しい下屋を設け、アプローチとした。そこは縁側であり、通路でありコミュニティをつなぐ仕掛けとなっている。



■コンセプト

古く提灯店には古くからの歴史があり、栃木市にとって貴重な文化財であると同時に、側街街道沿いのまちなみをつくっていく重要な位置に建っています。大通りから奥へと続く敷地を一体として捉え、最大限活用していきます。

プログラムは貸しオフィスと住宅を想定します。栃木の伝統的な建築物をオフィスに転用することで、企業を栃木に誘致し、対外的に栃木の魅力を宣伝していきます。さらに、住宅部分では全国的にも問題である独居高齢者のための暮らしを提案します。

栃木の問題を解決しながらも、今後の栃木市のまちづくりの可能性が更に拡がっていく空間作りを提案します。

図3 鳥瞰パース



写真5 改修前建物外観

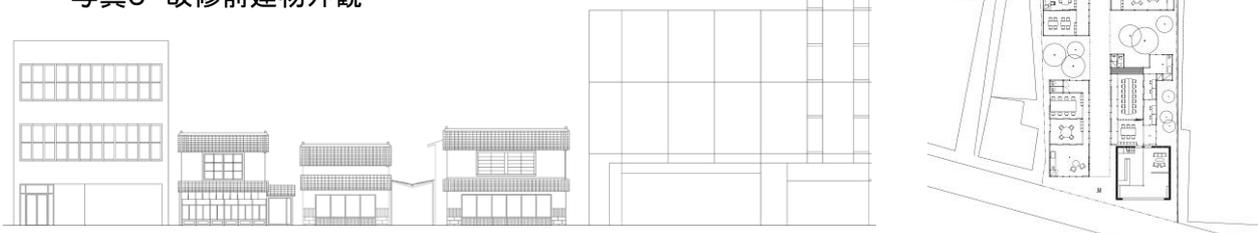


図4 上:裏通りから見た立面図 左下:表通りから見た立面図 右:改修後の平面図

■情報発信する「見世蔵」

元来、町と住宅との中間領域的な場所であり、町との接点であった見世蔵を展示、情報発信、打ち合わせスペースといった空間へと改修する。住宅部分のプログラムであるオフィスの広告、宣伝の場となること、そして、来訪者との打ち合わせの場所として考えている。現代に適応した町の接点になる見世蔵の提案とした。



図5 見世蔵イメージパース

■昔ながらの空間を利用した執務空間

既存の住宅部分はシェアオフィスへと改修する。さらに、古き良き木造建築を敷地に移転してくることで、執務空間を増やす。シェアオフィスと貸しオフィスによる執務空間の提案とした。下屋によって出来た軒下空間は、市民に開放され、人が自由に入出入りする。町の人と働いている人の交流の場所となっていく、オフィスが町に賑わいをもたらすことであろう。



図6 オフィスイメージパース

■孤独を感じない住まい

日本全国で高齢者の増加が問題となっている。栃木町においては、高齢者が住まわれている伝統建築がそのまま利用されずに放置され、貸し出すことや改築することが難しくなっている。新たな価値を創出出来なくなっているのが現状であるため、それらの問題を解決するために敷地内に住宅部分を設計する。地域に住む高齢者の方を敷地内の住宅へと誘致することで、伝統建築を利用できるサイクルを作りだすことを考える。

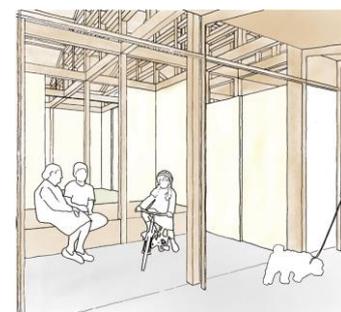
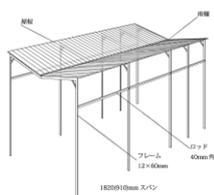


図7 住居イメージパース

■まちなみに合わせた新しい下屋空間

「下屋」とはもともと「母屋から差し出して作られた屋根」のことであり、北関東の建築の特徴でもある。大通りから裏通りまで下屋を中心とした小径を作ることで奥行きのある敷地を最大限に活用することを考える。

下屋を設けることで栃木市の瓦屋根が連続したまちなみをつくる。



- 新しい下屋について -
下屋の良さは庇を作ることにあります。庇は日光を遮り、雨露をしのぐ空間となります。また、そこでは近所の人たちの挨拶や会話、半屋外空間としての利用など、様々なことが行われるでしょう。それらの利点や利用の仕方に加えて、「通りを繋ぐ」という機能を持たせます。栃木ならではの「新しい下屋」として生活を溢れ出させ、通りと通りを繋ぐ空間を提案します。



図8 新しい下屋空間ダイヤグラム



図9 新しい下屋空間断面パース